

第 70 回名古屋春栄会
演目のあらまし

令和7年8月3日

名古屋春栄会事務局

目 次

六浦（むつら）	1
淡路（あわじ）	2
遊行柳（ゆぎょうやなぎ）	3
蝉丸（せみまる）	4
二人静（ふたりしずか）	5
千手（せんじゅ）	7
歌占（うたうら）	8
昭君（しょうくん）	9
融（とおる）	10
歌占（うたうら）	11
鵜飼（うかい）	12
六浦（むつら）	13
鵜（ぬえ）	14
初雪（はつゆき）	15
高砂（たかさご）	16
〔能のミ二知識	17〕

このリーフレットは、第70回名古屋春栄会の演目を解説したものです。

演目の記載順は、番組の順です。

詞章については、金春流の謡本から転載しました。

六浦（むつら）

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作 者】金春禅竹（?）

【主人公】前シテ：里女（面：小面）、後シテ：楓の精（面：小面）

【あらすじ】（今回の独調〔クセ〕の部分…下線部）

都の僧が東国行脚の途中、相模国（神奈川県）六浦の称名寺に立ち寄ると、折りしも山々の木々が今を盛りと紅葉しているのに、この寺の一本の楓だけが少しも紅葉していないので、不審に思っていると、ひとりの里の女が現れます。女は、昔、鎌倉中納言為相卿がこの寺に来た時、この木だけが山々に先立って紅葉しているのを見て、和歌を一首詠じたところ、この木は喜び、功成り名を遂げた上は身を退くのが天の道と信じて、それ以来常緑樹のようになったのです、実は私は楓の精であると言って秋草の中に消え失せます。

<中入>

その夜、僧がここで過ごしていると、楓の精が現れて、草木も成仏できる仏徳を称えて舞を舞いますが、明け方になると影の如く消えてしまいました。

【詞章】（今回の独調〔クセ〕の部分の抜粋）

または桜の花盛。ただ雲とのみ三吉野の。千本の花に。如くはなし。月日経て。移れば変わる眺めかな。桜は散りし庭の面に。咲きつづく卯の花の垣根や雪にまごうらん。時移り夏暮れ秋もなかばになりぬれば。空定めなきむら時雨。昨日はうすきもみじ葉も。露時雨もる山は。下葉残らぬ色とかや。さるにても。東の奥の山里に。あからさまなる都人の。あわれも深き言の葉の。露の情に引かれつつ。姿をまみえかずかずに。言葉をかわす知遇の縁。深きみ法を授けつつ。仏果を得しめ。たまえや。

淡路（あわじ）

【分 類】 初番目物（協能＝男神物） ＊急ノ舞

【作 者】 不詳

【主人公】 前シテ：老翁（面・尉面）、後シテ：伊邪那岐神（面・大天神）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

今上の帝に仕える大臣と従者が住吉・玉島の社へ参詣した後、淡路の国に古跡見物に立ち寄ります。淡路国ではちょうど、苗代づくりの季節なので、水田の取水口にいくつもの御幣が立ててあります。農作業に御幣とは、さてはここは神田かと、大臣が作業をしている老人に理由を問うと、老人は「谷水を堰く水口に五十串立て、苗代小田の種蒔きにけり」という和歌を口に、二の宮の神田である旨を伝えます。そこで大臣は「ここが二の宮なら、一の宮はゆず葉権現か」と再び問います。老人はそれに対して、大臣の考え違いを指摘し、二の宮とは神社の社格を表わすのではなく、イザナギ・イザナミの二神と一緒に祀っているために付いた名称でだと説明します。そして、イザナギには万物の種を蒔く意味があり、イザナミにはその収穫を収めるという意味があるので、当地は今日でも、豊かな実りに恵まれた土地となっているのだといいます。そして、イザナギとイザナミによる国生み神話を物語ります。話が終わると、老人は「神代の天の浮橋の様子を見せよう」と大臣たちに告げ、「鳥羽玉のわが黒髪も乱れずに、結び定めよ小夜の手枕」という和歌を残して、天上に消えてしまいます。

＜中入＞

その夜、春の月夜を眺めている大臣たちの耳に神楽の音が聞こえ、目の前に光がさしたかと思うと、伊邪那岐（イザナギ）が現われます。そして、天神七代地神五代を経て今の御世に至るまで「風は吹けども山は動かず」と、天下泰平を喜び、さまざまな神遊びを繰り返した後、わが国が幾久しく栄えることを約束するのでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

ふり下げし鉾の滴り露凝りて。一島となりしを。淡路よと見つけし。ここぞ浮橋の下ならん。げにこの島の有様。東西は海まんまんとして。南北に雲峰をつらね。宮殿にかかる浮き橋を。立ち渡り舞う雲の袖。さすは御鉾の手風なり引くは。潮の時つ風。治まるは波の芦原の。国富み民も豊かに。万歳を謡う春の声。千秋の秋津洲。治まる国ぞ久しき。治まる国ぞ久しき。

遊行柳（ゆぎょうやなぎ）

【分類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作者】観世小次郎信光

【主人公】前シテ：老翁（面・三光尉）、後シテ：老柳の精（面・石王尉）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

一遍上人の教えを全国に広めようとしている諸国遊行の僧が、上野国（千葉県）から奥州へと旅します。白河の関を越えて、新道を行こうとすると老人が現れ、声をかけます。老人は、先代の遊行上人が通ったのは、その新道ではなく、古道と呼んでいる昔の道だといい、またそこには朽木の柳という名木があると教えます。そして、僧をそちらへ案内します。もう今はあまり人の通わなくなり、草の生い茂った古道をついて行くと、古塚の上に柳の老木があります。僧がこの柳のいわれを尋ねると、老人は昔、西行がこの地へ旅し、「道のべに 清水流るる 柳かげ しばしとてこそ 立ちどまりつれ」という歌を詠んだことを教えます。そして、僧に求めて十遍の念仏を授かると、古塚に姿を消してしまいます。

<中入>

僧は通りかかった土地の者からも、朽木の柳のいわれを聞き、先程の老人の話をしますと、土地の者は驚いて、再度、奇特を見るように勧めます。その夜、古塚のそばで、僧が念仏を唱え、仮寝をしていると、柳の精が白髪の老翁姿で現れます。そして、夕刻、ここに案内した者だと明かし、草木の霊まで成仏することのできる念仏の功德をたたえます。さらに柳にちなむ和漢の故事をひき、楊柳観音や蹴鞠のこと、さらに「源氏物語」の柏木の恋の話へと次々と話題を広げてゆき、十遍の念仏への報謝の舞を心静かに舞って見せます。僧が夜明けの風に目覚めると、そこには朽木の柳が立っているだけした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

そのかみ洛陽や。清水寺のいにしえ。五色に見えし瀧波を。尋ねのぼりし水上に。金色の光さす。朽木の柳たちまちに。楊柳観音とあらわれ。今に絶えせぬ跡とめて。利生あらたなる。歩みを運ぶ霊地なり。されば都の花盛り。大宮人の御遊にも。蹴鞠の庭の面。四本の木蔭枝たれて。暮に数ある沓の音。柳桜をこきまぜて。錦をかざる諸人の。花やかなるや小簾の隙洩りくる風の匂いより。手飼の虎の引綱も。長き思いに楸の葉の。その柏木の及びなき。恋路もよしなしや。これは老いたる柳色の。狩衣も風折も。風にただよう足もとの。弱きもよしや老木の柳。気力なうしてよわよわと。立ち舞うも夢人を。現と見るぞ。はかなき。

蝉丸（せみまる）

【分 類】 四番目物（狂女物） ＊カケリ

【作 者】 世阿弥

【主人公】 シテ：逆髪（面・増髪）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

延喜帝の第四皇子、蝉丸の宮は盲目の身に生まれつきました。帝は、宮の後世を助けるため、清貫に命じて、逢坂山に捨てさせられます。清貫は悲しみますが、かえって蝉丸は、過去の罪業を償わせようとの父君の慈悲なのだと、恨み嘆く態度を見せません。清貫は宣旨の通りに、蝉丸を剃髪、出家させ、簑、笠、杖をおいて去ってゆきます。一人になると、蝉丸もさすがに淋しく、琵琶を抱いて泣き伏します。やがて博雅三位がやって来て、蝉丸を慰め、小屋を作りその中へ助け入れて、また見舞いに来ると言って、帰ってゆきます。蝉丸の姉宮逆髪〔さかがみ〕は、その名の如く頭の髪が上に向かって逆さまに生え、そのため狂乱となっています。彼女は御所をさまよい出て、いつしか逢坂山へとやって来ます。そしてふと気がつくと、近くの藁屋の内から妙なる琵琶の音が聞こえて来ます。不審に思って立ち寄ると、中から声をかけたのは、弟宮でした。姉弟は、互いに手を取りあって身の不運を嘆き悲しみ、また慰め合います。やがて、名残りを惜しみつつも、姉宮はいずこともなく去り、弟宮は見えぬ目で見送ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

花の都を立ち出でて。花の都を立ち出でて。うきねに鳴くか加茂川や。すえ白川をうちわたり。栗田口にも着しかば。今は誰をか松坂や。関のこなたと思ひしに。あとになるや音羽山の。名残惜しの都や。松虫鈴虫きりぎりすの。鳴くや夕陰の山科の。里人もとがむなよ。狂女なれど心は。清滝川と知るべし。逢坂の関の清水に影見えて。今やひくらん望月の。駒の歩みも近づくか。水もはしり井の影見れば。われながらあさましや。髪はおどろを頂き。眉墨も乱れ黒みて。げに逆髪の影うつる。水を鏡という波の。うつつなのわが姿や。

二人静（ふたりしずか）

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】不明

【主人公】前シテ：里女（面・小面）、後シテ：静の霊（面・小面）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

吉野山勝手明神の神職は、正月七日の神事に供える若菜を摘むために、女を菜摘川へつかわします。菜摘女が、雪の消え残る野辺で若菜を摘んでいると、どこからともなく一人の女が現れて話しかけてきます。そして、吉野へ帰ったら神職の人などに頼んで、一日経で自分を供養してくれるよう伝言してほしいと言います。菜摘女は驚いて名を尋ねますが、女はそれには答えず、この旨を疑う人があれば、そのとき自分があなたに憑いて名を明かしましようと言いつつ消え失せます。

<中入>

急いで立ち帰った菜摘女は、この事を神職に告げ、自分でも不思議に思っているとふと疑いの言葉をもらすと、たちまち先刻の霊が乗り移って、気色が変わります。神職が霊に名を問うと、判官殿に仕えた者と述べ、静御前であることをほのめかします。静の霊であることを知った神職は、舞を所望し、跡を弔うことを約束します。女は宝庫に収められた昔の舞衣装を取り出させ、それをつけて舞い始めると、静の亡霊も同じ衣装で現れます。そして女の影に添うごとく、義経の吉野落ちの辛苦や、頼朝に召されて舞を所望され、心ならずも舞った時の有様を物語りつつ、二人一体の如く舞い、後の回向を頼んで、静の霊は去っていきます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

さても判官は兇徒に准ぜられ。すでに討手向うと聞こえしかば小船にとり乗り。渡辺神崎より。おし渡らんとせしに。海路心にまかせず難風吹いて。もとの地に着きしこと天命かと思えば。科なかりしも。科ありけるかと。身を怨むるばかりなり。さるほどに。次第次第に道せまき。おん身となりてこの山に。分け入りたもう頃は春。所は三吉野の花に宿かる下伏も。のどかならざる夜嵐に。寝もせぬ夢と花も散る。まことに一栄一落。まのあたりなる浮世とて。またこの山を落ちてゆく。むかし清見原の天皇。大友の皇子に襲われて。かの山に踏み迷い雪の木陰を。頼みたまひける。桜木の宮。神の宮滝。西河の滝。われこそ落ちゆけ落ちても波は返るなり。さるにても三吉野の。頼む木陰の花の雪。雨もたまらぬ奥山の。音騒がしき春の夜の。月はおぼろにてなお足引きの山深み。分け迷いゆく有様は。もろこしの。祚国は花に身を捨て。遊子残月に行きしも。今身の上に白雪の。花を踏んでは。同じく惜しむ少年の。春の夜も。静かならで。騒がしき三吉野の。山風に散る花までも。追手の声やらんと。跡をのみ三吉野の。奥深く急ぐ。山路かな。そのみならず憂

かりしは。頼朝に召しいだされ。静は舞の上手なり。とくとくとありしかば。心もとけぬ舞の袖。返す返すも。怨めしく。むかし恋しき。時の和歌。しずやしず。

<序ノ舞>

賤やしず。賤のおだまき。繰りかえし。昔を今に。なすよしもがな。思い返せばいにしえも。思い返せばいにしえも。恋しくもなき憂き事の。今も怨みの衣川。身こそは沈め。名をば沈めぬ。武士の。物ごとに浮世の習いなればと。思いかえせば山桜。雪に吹きなす花の松風。静が跡をといたまえ。静が跡を。といたまえ。

千手（せんじゅ）

【分 類】 三番目物（現在鬘物） *序ノ舞
【作 者】 金春禅竹
【主人公】 シテ：千手の前（面・増女、小面ニモ）

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

平重衡は、平清盛の五男で、一の谷の合戦では、大手（正面）の陣となった生田ノ森方面の副将でしたが、戦に敗れ、捕われて鎌倉に護送されます。鎌倉では狩野介宗茂に預けられ、幽囚の身で世の無常を嘆いています。源頼朝は、この若く凛々しい平家の御曹子に少なからず同情を寄せ、自分の侍女で、手越ノ宿の長者の娘である千手の前をつかわし、後いくばくもない命のつれづれを慰めます。ある春の雨の降る夜、宗茂は重衡に酒を勧めようとやって来ます。そこへ千手も琵琶を持って訪れます。重衡は、先日、千手を通じて頼朝に願い出てあった出家の望みがかなわぬことを告げられ、これもまた、父清盛の命令とはいいいながら、南都（奈良）の仏寺を焼いた罪業の報いかと嘆きます。千手は重衡の心中を思いやり、酒の酌をし、朗詠を謡い、舞を舞って、心を引き立たせようとします。重衡も興にのって、琵琶を弾くと、千手も琴を合わせ、夜の更けるまで、つかの間の小宴を楽しみますが、翌朝、重衡は勅命によって、また都へ送り帰されることになり、鎌倉を出立します。千手は、その後姿を涙ながらに見送るのでした。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

今は梓弓。よし力なし重衡も。引かんとするにいず方も。網を置きたるごとくにて。
のがれかねたる淀鯉の。生捕られつつ川越の。茂房が手に渡り。心のほかの都入り。
げにや世の中は。定めなきかな神無月。時雨降りおく奈良坂や。衆徒の手に渡りな
ば。とにもかくにも果てはせで。また鎌倉に渡さるる。ここはいづくぞ八つ橋の。
雲居の都。いつかまた。三河の国や遠江。足柄箱根うち過ぎて。明けもやすらん星
月夜。鎌倉山に入りしかば。憂き限りぞと思ひしに。馴るればここも忍びねに。哀
れ昔を思い妻の。灯暗うしては。数行虞氏が涙の。雨さえしきる夜の空。四面に楚
歌の声の内。何とか返す舞の袖。思いの色にや出でぬらん。涙を添えてめぐらすも。
雪のふるえの枯れてだに花咲く。千手の袖ならば。重ねていざや。返さん。

歌占（うたうら）

【分 類】 二、四番目物（男物狂物） ＊カケリ

【作 者】 観世十郎元雅

【主人公】 シテ：渡会家次（直面）

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

伊勢二見の神職渡会家次は、諸国一見の旅の途中、急死しましたが、三日後には蘇生します。しかし、地獄を見て来た恐怖のため、髪は真白に変じてしまいます。そして今は、和歌の文辞によって吉凶を判じる歌占を渡世として、諸国を流浪していますが、たまたま加賀国（石川県）白山の麓へやって来ます。一人の里人が、最近この地に来た男神子の歌占がよく当たるということを聞いて、親に別れて尋ね歩いている子供を連れて、見てもらいに来ます。最初里人が、短冊をひくと「北は黄に南は青く東白、西紅に染め色の山」とあります。神子は、親の病気は治り長生きすると判じます。つづいて子供が短冊をひくと「鶯のかいこ（卵）の中の時鳥、しゃ（己）が父に似てしゃが父に似ず」とあり、父の行方を尋ねると、神子はその歌の意味を説明し、これは既に逢っている占だと判じます。そして不思議のあまり、身の上を問いただすと、我が兄であることがわかり、奇しき再会を喜びます。里人は別れに、地獄の曲舞を所望します。神子は、これを謡うと神がかりになるのでとためらいますが、せっかくの頼みだからと舞い始めると果たして正気がなくなりますが、やがて狂乱から覚め、親子は故郷へと帰っていきます。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

時移り事去って。今なんぞ。渺茫たらんや人留まりわれ行く。たれかまた常ならん。
三界無安猶如火宅。天仙なおし死苦の身なり。いわんや下劣。貧賤の報においておや。などかその罪軽からん。死に苦しみを受け重ね。業に悲しみなお添うる。挫椎地獄の苦しみは。臼中にて身を斬ること。千段して。血狼藉たり。いちじつのそのうちに。万死万生たり。劍樹地獄の苦しみは。手に劍の樹をよどれば。百節零落す。足に刀山踏む時は。千肢ともに解すとかや。石割地獄の苦しみは。兩塊の大石もろもろの。罪人を砕くつぎの。火盆地獄は。頭に火炎を戴けば。はくせつのこっとうより。炎炎たる火を出だす。ある時は。焦熱大焦熱の。炎にむせびある時は。紅蓮大紅蓮の。氷に閉じられ。鉄杖頭を砕き。火燥あなうらを焼く。飢えては鉄丸を呑み。渴しては。銅汁を飲むとかや。地獄の苦しみは無量なり餓鬼の。苦しきも無辺なり。畜生修羅の悲しみも。われらにいかで勝るべき。身より出だせる咎なれば。心の鬼の身を責めて。かように苦をば受くるなり。月の夕べの浮き雲は。後の世の迷い。なるべし。

昭君（しょうくん）

【分 類】四、五番目物（鬼神物） *舞働

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：昭君の父・白桃（面・小尉）、
後シテ：呼韓邪単于の霊（面・小癡見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

昔、中国の漢の皇帝は、胡国と和平のために、三千人の侍女の中から王昭君を選び、胡王の呼韓邪単于〔こかんやせんう〕に贈りました。昭君の年老いた父の白桃〔はくとう〕と母の王母〔おうぼ〕はその事をいたく悲しんでいます。それに同情した里人が慰めに行くと、老夫婦は柳の木の下を掃き清めています。そして、この柳は、娘の昭君が胡国に行くときに「自分が彼の地で死ねばこの木も枯れましょう」と言って植えていったのだが、見れば早や片枝が枯れてきたと嘆きます。そして涙にくれつつも、昭君が胡国に連れて行かれた訳を物語り、さらに桃葉〔とうよう〕という人が死んだ仙女の姿を鏡に映る形見の桃の花に見出したという故事を思い出し、鏡には恋しく思う人の映った例もあるので、昭君の形見の柳を鏡に映せば、娘の姿が見えるかも知れぬと、鏡に向かって泣き伏します。

<中入>

やがて、昭君の幽魂が現れると、ついで単于の幽霊も父母に直面せんと現れ出ます。しかし、単于は鏡に映った鬼神のような恐ろしい自分の姿を恥じて消え失せ、昭君の花の姿ばかりが鏡に残り、物思いに沈む父母を慰めます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

荊棘〔おどろ〕をいただく髪筋は。荊棘をいただく髪筋は。主を離れて空にあり。
元結さらにたまらねば。真葛〔さねかずら〕にて結びさげ。耳には鎖をさげたれば。
鬼神と見たもう。姿も恥かし。鏡に寄り添い立っても居ても。鬼とは見れども人とは見えず。それかあらぬか我ながら。恐ろしかりける顔つきかな。面目なしとて立ち帰る。ただ昭君の眉墨は。ただ昭君の眉墨は。柳の色に異らず。罪を現わす浄玻璃や。それも隠れはよもあらじ。花かと見えて曇る日は。うわの空なるもの思い。影もほのかに三日月の。曇らぬみ代の心こそ。まことを思う。鏡なれ。まことを思う。鏡なれ。

融（とおる）

【分 類】五番目物（切能＝貴人物） ＊早舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：汐汲みの老人（面：三光尉）、後シテ：源融の霊（面：中将）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

東国から京へ上った諸国一見の旅僧が六条河原の院を訪れ休んでいると、そこへ田子を担った老人がやって来ます。僧は、ここは海辺でもないのに汐汲み姿をしているのはどうしてかと尋ねます。すると老人は、ここは塩釜の浦を写した海辺だと答え、その昔に左大臣源融が塩釜の浦を模して造園し、毎日難波の浦から海水を運ばせて、塩を焼かせるという風流を楽しんだが、今はすっかり荒れ果てていると語ります。そして京の山々の名所を指し示しながら教えると、そろそろ汐を汲む頃合いだと見て消え失せます。

<中入>

僧は来合わせたこの辺りの者に、老人は源融の霊だろうと教えられ、弔うよう勧められます。僧は、その夜は夢の出会いを期待しながら旅寝をします。すると貴人姿の融大臣が現れ、名月の下で舞を舞い、夜明けと共に消えて行きます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋。今回は笏ノ舞なので、急ノ舞となります。）

磯枕苔の衣を。片敷きて。苔の衣を片敷きて。岩根の床に夜もすがら。なおも奇特を見るべしと。夢待ち顔の旅寝かな。夢待ち顔の旅寝かな。忘れて年を経しものを。まった古に帰る波の。満つ塩竈の名にしおう。今宵の月を陸奥の。千賀の浦わの遠き世に。その名を残す大臣。融の大臣とは。わが事なり。われ塩竈に心をうつし。あの籬が島の松蔭に。名月に舟を浮かめ。月宮殿の白衣の袖も。三五夜中の新月の色。千重ふるや。雪をめぐらす雲の袖。さすや桂の枝枝に。光を花と。散らす粧い。ここにも名に立つ白河の波の。あら面白や曲水の杯。うけたりうけたり。遊舞のそで。

<急ノ舞>

あら面白の遊楽や。あら面白の遊楽や。そも名月のその中に。まだ初月の宵々に。影も姿も少なきはいかなる謂なるらん。それは西岫に。入り日のいまだ近ければ。その影に隠さるる。たとえば月のある夜は。星の薄きがごとくなり。青陽の春の始めには。霞む夕べの遠山。黛の色に三日月の。影を舟にもたとえたり。また水中の遊魚は。釣針と疑い。雲上の飛鳥は。弓の影とも驚く。一輪もくだらず。万水ものぼらず。鳥は池辺の木に宿し。魚は月下の波に伏す。聞くとも飽かじ秋の夜の。鳥も鳴き。鐘も聞こえて。月もはや。影かたむきて明け方の。雲となり雨となる。この光陰に誘われて。月の都に。入りたもう粧い。あら名残惜しの面影や。名残惜しの。面影。

歌占（うたうら）

【分 類】 二、四番目物（男物狂物） ＊カケリ

【作 者】 観世十郎元雅

【主人公】 シテ：渡会家次（直面）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

伊勢二見の神職渡会家次は、諸国一見の旅の途中、急死しましたが、三日後には蘇生します。しかし、地獄を見て来た恐怖のため、髪は真白に変じてしまいます。そして今は、和歌の文辞によって吉凶を判じる歌占を渡世として、諸国を流浪していますが、たまたま加賀国（石川県）白山の麓へやって来ます。一人の里人が、最近この地に来た男神子の歌占がよく当たるということを聞いて、親に別れて尋ね歩いている子供を連れて、見てもらいに来ます。最初里人が、短冊をひくと「北は黄に南は青く東白、西紅に染め色の山」とあります。神子は、親の病気は治り長生きすると判じます。つづいて子供が短冊をひくと「鶯のかいこ（卵）の中の時鳥、しゃ（己）が父に似てしゃが父に似ず」とあり、父の行方を尋ねると、神子はその歌の意味を説明し、これは既に逢っている占だと判じます。そして不思議のあまり、身の上を問いただすと、我が兄であることがわかり、奇しき再会を喜びます。里人は別れに、地獄の曲舞を所望します。神子は、これを謡うと神がかりになるのでとためらいますが、せっかくの頼みだからと舞い始めると果たして正気がなくなります。が、やがて狂乱から覚め、親子は故郷へと帰っていきます。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

五体さながら苦しみて。白髪は乱れ逆髪。雪を乱せるごとくに。天に叫び。地に倒れて。神風のひと揉み揉んで。かみかぜのひと揉み揉んで。時しも卯の花くだしの。さみだれも降るやとばかり。面には。白汗を流して。袂には露の繁玉。時ならぬ霞玉散る。あしぶみはとうとうど。手の舞い笏拍子。打つ音は窓の雨の。震いわななき立つ居つ。肝胆を砕く神の怠り。申し上ぐると見えつるが。神は上がらせ給いぬとて。ぼうぼうと狂い覚めて。いざやわが子ようち連れて。またも帰りなば二見の浦。またも帰らば二見の。浦千鳥友呼びて。伊勢の国へぞ帰りける。

鵜飼（うかい）

【分 類】五番目物（鬼物＝鬼神物） ＊カケリ

【作 者】榎並左衛門五郎原作、世阿弥改作

【主人公】前シテ：鵜使いの老人（面・三光尉）、後シテ：閻魔王（面・小癡見）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

安房国（千葉県）の清澄の僧が、甲斐国（山梨県）への行脚を志し、途中、石和川のほとりに着きます。その土地の人に、一夜の宿を頼みますが、旅の者に宿を貸すことは禁制だと断られます。その代わり、川辺の御堂を教えられ、そこに泊まることにします。するとそこに一人の老人が鵜を休めるために立ち寄ります。僧が、老人なのにいつまでも殺生するのはやめて、他の職業についたらと意見をすると、老人は、自分は若い時からこの仕事で生計を立ててきたので、今さらやめるわけにはいかないと答えます。従僧が、二、三年前にこの地を訪れた時、このような老人に会い、もてなしを受けたと話すと、老人はその鵜使いは禁漁を犯したため殺されたと語り、実は自分がその亡霊だと明かします。僧のすすめで亡者は罪業消滅のため鵜飼のさまを見せて消えてゆきます。

＜中入＞

僧たちはやって来た先刻の土地の者からも、密漁をして殺された男の話を聞き、先ほどの老人こそ鵜使いの化身であったと信じ、法華經の文句を川辺の石に一字ずつ書いて川に沈めて回向します。すると地獄の鬼が現れて、かの鵜使いは地獄へ墮ちるはずであったが、生前、僧を接待した功德と、法華經の効力によって救われ、極楽へ送ることになったと告げ、法華經のありがたさをたたえます。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

法華は利益深きゆえ。邪道に沈む群類を。救わんために来たりたり。げに有難き誓いかな。妙の一字はさていかに。それは褒美の言葉にて。妙なる法と説かれたり。經とはなどや名付くらん。それ聖教の都名にて。二つもなく。三つもなく。ただ一乗の徳によりて。奈落に沈み果てて。浮かみがたき悪人の。仏果を得ん事は。この經の利益ならずや。これを見かれを聞く時は。これを見かれを聞く時は。たとい悪人なりとも。慈悲の心を先として。僧会を供養するならば。その結縁に引かれつつ。仏果菩提に至るべし。げに往來の利益こそ。他を助くべき力なれ。他を助くべき力なれ。

六浦（むつら）

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作 者】金春禅竹（?）

【主人公】前シテ：里女（面：小面）、後シテ：楓の精（面：小面）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

都の僧が東国行脚の途中、相模国（神奈川県）六浦の称名寺に立ち寄ると、折りしも山々の木々が今を盛りと紅葉しているのに、この寺の一本の楓だけが少しも紅葉していないので、不審に思っていると、ひとりの里の女が現れます。女は、昔、鎌倉中納言為相卿がこの寺に来た時、この木だけが山々に先立って紅葉しているのを見て、和歌を一首詠じたところ、この木は喜び、功成り名を遂げた上は身を退くのが天の道と信じて、それ以来常緑樹のようになったのです、実は私は楓の精であると言って秋草の中に消え失せます。

<中入>

その夜、僧がここで過ごしていると、楓の精が現れて、草木も成仏できる仏徳を称えて舞を舞いますが、明け方になると影の如く消えてしまいました。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

まず青陽の春の始め。色香妙なる梅が枝の。かつ咲きそめて諸人の。心や春に。なりぬらん。または桜の花盛。ただ雲とのみ三吉野の。千本の花に。如くはなし。月日経て。移れば変わる眺めかな。桜は散りし庭の面に。咲きつづく卯の花の垣根や雪にまごうらん。時移り夏暮れ秋もなかばになりぬれば。空定めなきむら時雨。昨日はうすきもみじ葉も。露時雨もる山は。下葉残らぬ色とかや。さるにても。東の奥の山里に。あからさまなる都人の。あわれも深き言の葉の。露の情に引かれつつ。姿をまみえかずかずに。言葉をかわす知遇の縁。深きみ法を授けつつ。仏果を得しめ。たまえや。更けゆく月の。夜遊をなし。色なき袖をや。返さまし。

<序ノ舞>

秋の夜の。千夜を一夜に。重ねても。言葉残りて。鳥や鳴かまし。八声の鳥もかずかずに。八声の鳥もかずかずに。鐘も聞こゆる。明け方の空の。所は六浦の浦風山風。吹きしおり吹きしおり。散るもみじ葉の。月に照り添いて。からくれないの庭の面。明けなば恥かし。暇申して帰る山路に。行くかと思えば。木の間の月の。行くかと思えば。木の間の月の。かげろう姿と。なりにけり。

鵜（ぬえ）

【分 類】 四・五番目物（尾能）

【作 者】 世阿弥

【主人公】 前シテ：舟人（面・怪土）、後シテ：鵜の霊（面・小飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

諸国を行脚する旅の僧が、三熊野へ参詣した後、都に上る途中、摂津国（兵庫県）芦屋の里に着きます。土地の者に宿を乞いますが、旅人に宿を貸すことが禁制になっているとのことで、洲崎の御堂で一夜を明かすことにします。夜更け頃、そこへ異様な風体をした者が、丸木舟に乗って漕ぎ寄せて来ます。不審に思っ言葉をかけると、自分は近衛院の御代に、頼政の矢先にかかって命を失った鵜の亡魂であると名乗り、その射止められたときの模様を詳しく語ります。僧は回向をし、成仏をすすめますが、舟人はまた丸木舟に乗って夜の波間に消えて行きます。

<中入>

土地の者が見舞いに來たので、旅僧は頼政の鵜退治の物語を所望します。語り終えた土地の者は、鵜の亡霊への供養をすすめて帰って行きます。僧が海辺で読経していると、鵜の亡霊が現れ、供養を感謝します。そして、夜毎に帝を悩ましたため、頼政に退治されたことを語り、これも天罰であったと懺悔し、頼政はその功で、主上より御剣を賜ったこと、その時、宇治の大臣と歌のやりとりがあり、それでも名を上げたことを物語ります。そして、自分はうつぼ舟に入れられて淀川に流され、この芦屋の浮き洲にとどまって成仏できないでいたのだと言い、僧の回向を頼んで、海中へと消えて行きます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

東三条の林頭に。しばらく飛行し。丑みつばかりの夜な夜なに。ご殿の上に。飛び蔽えば。すなわちご悩。しきりにて。すなわちご悩しきりにて。玉体をなやまして。怯えたまぎらせ給うことも。わがなす業よと怒りをなししに。思いもよらざりし頼政が。矢先に当れば変身うせて。らくらくらいらいと地に倒れて。たちまちに滅せしこと。思えば頼政が。矢先よりは君の天罰をあたりけるよと。今こそ思ひ知られたれ。そののち主上御感あって。獅子王という御剣を。頼政にくだされけるを宇治の。大臣賜わりて。階を下りたもうに。おりふし郭公音ずれば。大臣とりあえず。ほととぎす。名をも雲居に。あぐるかなと。仰せられければ。頼政。右の膝をついて。左の袖をひろげ。月をすこし目にかけて。弓張月の。いるに任せてと。つかまつり御剣をたまわり。ご前をまかり帰れば。頼政は名をあげてわれは。名を流すうつお舟に。おし入れられて淀川の。淀みつ流れつゆく末の。鵜殿も同じ芦屋の。浦わの浮きすに。流れかかって。朽ちながらうつお舟の。月日も見えず暗きより。冥き道にぞ入りにける。はるかに照らせ山の端の。はるかに照らせ山の端の月

と共に。海月も入りにけり。海月とともに。入りにけり。

初雪（はつゆき）

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊中ノ舞

【作 者】金春禅鳳

【主人公】前シテ：姫君（面・小面）、後シテ：鶏の霊（面・増女）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

ある姫君が白い鶏を飼っていました。雪のように白いので「初雪」と名づけ、かわいがっていましたが、ある日死んでしまいました。姫君はひどく悲しみ、近所の上臈を集めて、供養をしました。すると、その初雪が空に現れ、弔いによって、極楽に行くことができ、楽しみつきない身になることができたと、しばらく懐かしそうに飛び回っていましたが、やがてどこかへ飛んで行ってしまいました。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

この念仏の功力にひかれ。この念仏の功力にひかれて。たちまち極楽の台にいたり。八功德池の汀に遊び。鳧雁鴛鴦につばさをならべ。七重宝樹の梢にかけり。楽しみさらに。つきせぬ身なりというつけ鳥の。羽風をたてて。しばしがほどは飛びめぐり。暫しがほどは飛びめぐりて。ゆくえも知らずなりにけり。

高砂（たかさご）

【分 類】初番目物（協能＝男神物） ＊神舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：住吉明神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

肥後国（熊本県）、阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中、播州（兵庫県）高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ竹杷（熊手）と杉箒を持った老夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また、高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、その理由を尋ねます。老人は、この松こそ高砂の松であると語り、たとえ場所を隔てていても夫婦の仲は心が通うものだ、現にこの姥は当所の者、尉は住吉の者だと言います。そして老夫婦は、さまざまな故事を引いて松のめでたさを語り、御代を寿ぎます。やがて二人は、実は相生の松の精であることを明かし、住吉でお待ちしていると告げて、小舟に乗って沖の方へ消えていきます。

<中入>

友成は、土地の者に再び相生の松のことについて聞き、先程の老夫婦の話をする、それは奇事なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽と舞います。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

げにさまざまの舞姫の。声もすむなり住の江の。松陰もうつるなる。青海波とはこれやらん。神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。それぞ還城楽の舞。さて万歳の。小忌衣。指すかいなには。悪魔を払い。おさむる手には。壽福をいただき。千秋楽は民をなで。万歳楽には命をのぶ。相生の松風。さっさっの声ぞ楽しむ。さっさっの声ぞ楽しむ。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のを効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといわれます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(霊[かづら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓:台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるものです。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡います。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態です。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するものです。演者は紋付袴姿です。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するものです。演者は紋付袴姿です。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞うものです(通常 5 分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞います。仕舞扇をしますが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いしません。シテ一人で演じるのが普通ですが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキー人、ツレと子方で演じるものもあります。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされています。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うものです。平均して 10~20 分程度の長さになります。長刀や杖などの手道具は用いますが、作り物(大道具)は省略します。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となりましたが、徳川五代將軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされています。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるものです。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるものです。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもののことをいいます。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するものです。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち一種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合があります。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるものです。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるものです。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞。

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の中間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも速く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽[かぐら]: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。
中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。
「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。
精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。
「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。
働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>